

「世界哲学の日」記念討論会 20201119、Zoom

日時：2020年11月19日（木）14時 - 17時

方法：Zoomのミーティング機能を用いたオンライン討論会

討論会タイトル：「現代哲学における脱超越論化の行方」

討論者：入江幸男大阪大学名誉教授、
須藤訓任現代思想文化学教授、
舟場保之哲学哲学史教授

司会：嘉目道人哲学哲学史准教授

概要：ハーバーマスの『真理と正当化』「序論」での議論（現代における脱超越論哲学の潮流として、ハイデガーとクワインを考えることができる、というもの）を端緒に、入江名誉教授、須藤教授による現代哲学における脱超越論化に関する考察ののち、討論を行う。

入江幸男発表原稿（当日、ZOOMでシェア）

1 舟場さんからの問題提起：

問題1「クワインとハイデガーは、ハーバーマスが言うような意味で脱超越論的なのか？」

問題2「もしそうだとしたら、ハーバーマスが指摘する脱超越論化の問題点を2人はクリアできているのか、あるいはクリアする必要はないと考えられるのか。」

（ハーバーマスが指摘する脱超越論化の問題点とは、「認識の客観性が脅かされること」と「世界と世界内的なものとの差異が消し去られること」です。）

問題1への解答：クワインによる問題1への予想される解答：

・ハーバーマスがいう「脱超越論化」とはどのような意味なのか？

ハーバーマスが、クワインとハイデガーと自分について「脱超越論化」を語る時、それぞれ意味が異なっているように見える。

・ハーバーマスが、クワインに「脱超越論化」を見る時、

その意味は認識論の「自然化」であり、自然主義をとることである。

・ハーバーマスが、ハイデガーに「脱超越論化」を見る時には、

その意味は「世界を生み出す超越論的な自発性を、言語がもつ世界開示的エネルギーへ翻訳することによって言語論的転回を成し遂げる」³¹ ことである。

・ハーバーマス自らが「脱超越論化」を語る時、

その意味は、第3節でのべる「超越論的問題設定の語用論化ということであり、「越論的な問題設定」を、「認識の下支えをする生活世界の諸構造全体にひろげる」¹⁷ ということである。

・解答：＜クワインが、認識論を自然化するという意味で、認識論を脱超越論化する＞という理解は正しいと思います。

クワインは<認識論を自然化する>言い換えると<認識論の課題を自然科学（心理学など）にゆだねます>。その理由と問題点については、後に述べます。

ところで、<クワインの哲学は、別の理由でも、脱超越論化だと言えます。それは、クワインが、分析的真理と総合的真理の区別を否定するという事です。>

クワインは「経験論の5つの里程標」(1975)という論文で、経験論が改良されてきた5つの転換点を挙げています。

第一は、観念から語へのシフト。(ロック)

第二は、項から文への意味論的焦点のシフト。(ベンサム)

第三は、文から文の体系への意味論的焦点のシフト。(デュエム、クワイン)

第四は、分析／総合の区別の否定。(クワイン)

第五は、自然主義：自然科学にたいする第一哲学の優位を捨てる。(クワイン)

ここでは、第四で、分析的真理と総合的真理の区別を廃棄し、それを踏まえて、第五の自然主義へ進むと思われるかもしれませんが、しかし、自然主義を採用する理由に、分析／総合の区別の否定は含まれていません。その区別ができたとしても、認識論を放棄せざるを得なかったのです。

クワインは、分析的真理と総合的真理の区別ができないことの証明を、分析的真理を定義できないことの証明によって行います。つまり、分析的真理は存在しないことになります。これに先立って、論理実証主義は、カントのいう「ア prioriな総合判断」は存在しないとしていたので、残るのは、経験的総合判断だけです。すべての判断が経験的総合判断であるとすれば、経験一般の可能性の条件についての超越論的論証はありえないことになります。したがって、分析／総合の区別の否定は、脱超越論化のもう一つの別の理由となります。

問題2について

問題2「もしそうだとしたら、ハーバーマスが指摘する脱超越論化の問題点を2人はクリアできているのか、あるいはクリアする必要はないと考えられるのか。」

ここでハーバーマスが指摘する「脱超越論化の問題点」は舟場さんが挙げている2点です。

問題点1：「はたして認識に客観性はあるか？」

問題点2：「世界と世界内的なものに差異はあるか？」

以下、別々に答えたいと思います。

問題点1「はたして認識に客観性はあるか」について

「クワインは、脱超越論化の問題点1「はたして認識に客観性はあるか？」をクリアできているのか？」

「はたして認識に客観性はあるか？」という問いに対する答えは、「認識の客観性」をどう定義するかに依存します。「客観性」に似た言葉として、「真理性」と「正当化」が登場します。ここでの「客観性」はこのどちらかの意味であると思われるので、それぞれについて検討します。

まず真理性について：クワインは「真理のデフレ説」をとり、「真である」という真理述語に「引用解除機能」しか認めません。（これについては、昨年「世界哲学の日記念講演会「真理について——問答の観点から」」で話す機会を頂きましたので Youtube でご覧ください。また発表原稿は、私の HP に up しています。）

従って「pは真である」と「p」と同じことです。「p」という認識が成り立つならば、「p」の真理性も成り立つというでしょう。

・ところで、ハーバーマスがこの本で述べている「真理性」つまり、「正当化」や「理想化された正当化」とは区別される「真理性」に関してならば、＜私たちの認識はそのような真理性を持ちえない＞と、クワインは言うでしょう。

次に正当性について：

「pは正当化されている」と言うためには、「p」単独ではなく、理論の全体を経験のテストにかける必要があります（上の第三里程碑）。ところが、観察文と整合的な理論体系は複数可能です。そこで、クワインは、それらの理論の中から、プラグマティックな考慮によって理論の選択を行います。

・クワインは、観察文との整合性を条件としたうえで、プラグマティックな観点から理論を選択するのだから、その選択は合理的であり、＜認識は「正当化」されている＞と答えるだろうと推測します。

・ちなみに、パースは、科学は将来「理想化された正当化」に行き着き、理論の正当化がいずれ一つの理論へと収束していくと考えたが、クワインはそのようには考えないでしょう。何故なら、その予想には、根拠がないからです（ミサック『プラグマティズムの歩き方』加藤隆文訳、下巻、勁草書房、p. 115）。

問題点2「世界と世界的なものに差異はあるか？」について

「クワインは、問題点2をクリアできているのか、あるいはクリアする必要はないと考えられるのか？」

「世界と世界的なものに差異があるとは、どういう意味か？」

「この差異がなくなることが、なぜ問題になるのか？」

ハーバーマスが考えているのは、つぎのような循環の問題だろうと思います。＜経験を可能にする規則が、超越論的なものではなく経験的なものであるとすると、経験の中にある規則が、経験を説明する、ないし構成することになる。＞

クワインがこの循環の問題にどう答えたかを説明するには、彼が認識の自然化を主張した理由を説明する必要があります。（以下は彼の論文 'Epistemology

Naturalized', in *Ontological Relativity and Other Essays*, 1969 「自然化された認識論」（伊藤春樹訳、『現代思想』1988年7月号）を参照しています。）

・認識論は、科学を基礎づけようとするものでした。しかし、それを、論理学と集合論と観察文から基礎づけられないことが明らかになりました。（全称文や反事実的条件文を証明できません）。

・そこで、認識論は、科学的言明の真理性ではなく、その意味を、論理学と集合論と観察文によって説明すること（「合理的再構成」（カルナップ））を目指すようになりました。しかし、理論的用語の意味をそれらでは定義できないことが明らかになったので、この試みも挫折しました。（「水溶性」を定義できません）。

・そこで、クワインは認識論を心理学やその他の科学に置き換えることを提案します。

「感覚受容器における刺激が、世界の描像を獲得する際にだれもが最終的に受け入れざるを得ない証拠のすべてである。ならば、この世界像が実際どのように構成されるのか、それをみてみようとなぜしないのか。どうして心理学で満足できないのか。」（第19段落）

しかし、「心理学やその他の経験科学」で、科学の基礎づけを目指すとするならば、循環論法になります。

「認識論の課題を心理学にゆずり渡してしまうのは、最初のころは循環論法だとして許されなかった。経験科学の基礎の確実性を示すところに認識論者の目標があるとすれば、その証明にあたって心理学やその他の経験科学を援用すれば、彼は目的に背くことになる。」（第19段落）

しかし、これに続けて彼は次のように言います。

「しかしながら、循環に対するそのような後ろめたさは、科学を観察から演繹しようという夢をひとたび放棄するならば大して意味がない。」（第19段落）

認識論が科学の基礎づけをあきらめて、科学の「合理的再構成」を意図しているのであるから、心理学によって科学の「合理的再構成」を目指すことにしても、循環論証にはならないというわけです。クワインの「認識論の自然化」は、認識論では科学の基礎づけができないので、「心理学」でそれに取組もう、ということではありません。

「われわれが躍起になっているのはただ観察と科学との結びつきを理解したいがためであるとすれば、利用できる情報はどんなものでも利用するのが分別というものだろう」（第19段落）

この状況をクワインはしばしば「ノイラートの船」に例えます（「経験論の2つのドグマ」「自然化された認識論」「経験論の5つの里程標」）。これは、ドックに入らないで航海しながら修理するという船ですが、この比喻に次の3つを付け加えたいとおもいます。

- ・ノイラートの船は、一人乗りではない。
- ・ノイラートの船は、底割れしない。
- ・ノイラートの船は、一艘とは限らない。

・このように考えるクワインは、＜ハーバーマスのいう「世界と世界的なものとの差異」を否定する＞と思います。そして循環を認めます。しかしその循環は、もはや基礎づけの循環ではありません。それは理解の循環です。そして、＜理解の循環には何の問題もない＞というのがクワインの答えです。

・クワインは、ハーバーマスの想定する「強い自然主義」ではないのかもしれませんが。

2 ハーバーマスについての質問

(1) ハーバーマスの「弱い自然主義」への疑問点

「種の自然進化は——社会文化的な発展段階で可能になったわれわれ自身の学習過程との類比から——「問題解決」の連鎖として理解することができ、それが種を、より高い学習水準をそなえた、より複雑な発展段階へと導いたということである」³⁶

ただし「この弱い自然主義には、還元主義的な要求は含まれていない。」

「弱い自然主義はあくまで二つの理論的視点〔生活世界の視点と自然科学の視点〕を分離したまま保持し、自然と文化の連続性を想定することによって両者をむしろメタ理論的なレベルで結びあわせる」³⁶

両者は、「問題解決の連鎖」ないし「学習」として共通している。

「「問題解決」の連鎖」あるいは「進化を通じての学習」これらの語彙を、「ネオ・ダーウィニズム的な概念で再解釈することは許されない。」³⁶ なぜなら、それでは強い自然主義になるから。

では、「問題解決の連鎖」あるいは「進化を通じての学習」という共通の構造を、ハーバーマスはどのように説明するのだろうか。この答えが与えられていないのではないだろうか？

(2) ハーバーマスは、最終的に次のような立場をとるのか？

- ・陳述については、正当化のみをみとめ、真理性をみとめない。
- ・規範については、正当化＝真理性と考え、これらを認めるが、複数性も認める？
- ・世界と世界的なものとの差異をみとめるが、もし認めないとカント的な自律道徳をとれなくなるから。つまり、何らかの意味で超越論的なものを認める？

3 問答の観点から真理と正当化を区別する

正当化の説明：知識は問いへの答えとして成立する。

知識とは、正当化された真なる信念 (JTB) である (これは十分条件ではないが、必要条件である)。これに

「知識は問いへの答えとして成立する」

を加えたい (これで十分であるかどうかは、別途検討します)。なぜなら、命題は問いに対する答えとして明示的な意味を持つからです。

ところで、正当化は、答えと根拠の関係である。正当化された答えとは、根拠を持つ答えである。さらに、根拠を持つとしても、その根拠が真でなければ、その答えは真ではないかもしれない。ただし、その根拠が真でなくても、別の根拠によってその返答は真であるかもしれない。

つまり、答えの正当化とは、返答者が用意している根拠との関係によって行われることであるが、答えが真であることは、正当化されていること、根拠を持つことではなく、根拠についての私たちの理解と関係なく、成立していることである。しかし答えの真理性は、私たちの理解と関係なく成立していることではない。それは私たちの問いの理解との関係によって成立している。なぜなら、答えとなる命題は、問いとの関係においてのみ有意味であり、真となりうるからである。

真理性の説明：命題は、問いへの答えとしてのみ真となりうる。真理性は、問答の関係である。

問いに対する答えが、真であるかどうかは、その答えの根拠についての私たちの理解とは無関係に成立している。しかし、私たちの問いの理解と無関係に成立するのではない。

真理性は、正当化を越えるが、問答を越えない。ある答えは、その正当化を越えて、真であるかもしれないが、しかし、その問答関係を越えて真であることはない。

ところで、 p が真であるとき、 p の意味は p の相関質問 Q との関係で確定する。したがって、 p が真となるのは、相関質問への答えとしてである。 p は、 Q との関係を離れては無意味であり、それゆえに真ではありえない。 p が真であるとは、 Q に対する真なる答えであるということである。 p が Q に対する真なる答えであることと、 p が正当化されていることは、独立した事柄である。

<「真理」が「正当化」から独立しているとはどういうことか>を、このように説明出来る。